



阿南市の花「ひまわり」の花言葉は、「光輝く」です。人権について考え守っていくことが、まさに光り輝く阿南市づくりにつながります。人権教育・啓発コーナー「ひまわり」では、人権に対する思いを掲載していきます。

超少子化の中を生きる 現代っ子たち

徳島県人権教育指導員

稲村 健一さん

はじめに

「現代っ子がへん」「現代っ子がどうもおかしい」と言われて久しいものがあります。果たして本当でしょうか。

もし、子どもたちが変わったとすれば、何が子どもたちを変えたのでしょうか。

超少子高齢化時代の中で

現代が「少子高齢化時代」にあることを知らない人はいないでしょう。でも、それがどの程度のものなのか

始まって以来のことなのかもしれません。『有史始まって以来』などというと大きさに聞こえるかもしれませんが、現在の少子化の進行ぶりはそれほど際立っているということですね。

なお、県統計によれば、本県でも出生数が多かった昭和23年には、実に3万2003人の赤ちゃんが生まれていました。当時の本県の総人口はといえば85万4811人。平成20年の総人口79万9189人と比べても、それほど大きな差はありません。85万人の県民が3万2000人余りを生み育てていた出生力が、79万人をもつてしても6000人弱しか生み育てられないほど低下したといえれば分かりやすいでしょうか。

家では「王子様」「王女様」？

戦後のベビーブーム期にあつては、どの家庭も子だくさんで、家の中では兄弟姉妹たちがひしめき合っていました。当然、きょうだい間で切磋琢磨し合うのは当たり前。上の子が下の子の面倒を見る良さがあつた反面、きょうだい間で生じる軋轢やストレスはハンパなものではなかったでしょう。人間関係を磨き合う力や、たくましく生き抜く力がおのずと育つた時代と言えるかもしれせん。

かたや、少子化の極みともいわれ

る現代。切磋琢磨し合おうにも家にきょうだいはなく、地域にも昔のようには組んずほぐれつして遊ぶ幼友達はいません。家庭にあつてはどの子も過保護にされがちで、いわば「王子様」「王女様」状態なのかもしれません！

子どもは社会を映し出す鏡

忍耐力がない、コミュニケーション力がない、すぐキレるなど、現代っ子批判に余念のない大人たちですが、「現代っ子がへん」と騒ぐ前に、「なぜ子どもたちが変わったのか」「何が子どもたちを変えたのか」をどうして明らかにしないのでしょうか。いつの時代も、子どもたちは社会を映し出す鏡です。子どもが勝手に変わることはありません。

私は、子どもたちを変えたのは紛れもなくこの社会であり、われわれ大人に他ならないと考えます。その意味でも、われわれ大人が正しく子どもたちを導く使命と責任を果たしていかなければならないのではないのでしょうか。

問い合わせは

人権・男女参画課

(☎22-3094)へ

